

第3回 子どもの学びを創る会 2004年10月29日

「問い」から始まる真の学びを創る

芝田 秀樹（豊北町立阿川小学校）

「教える」こと中心の教育の反省から、「自ら学び自ら考える」教育への転換が叫ばれ3年目。しかし、この教育の基調の転換には、まず子どもが自ら「問う」ことが前提になっているという問題意識が希薄であることが気になる。

「自ら学ぶ」という主体的な営みは、より確かなものを求めて「問う」ことから始まる。子どもが「問う」授業をつくらずして、自ら考える場面には遭遇しない。



カニが穴から出たって？

学ぶ意味の自覚化と「問い」 ―学びへの発心―

「なぜ、人間は学ぶのか」という疑問は、難問ではあるが、人間は自分にとって価値あるものに引かれやすい。本能と言える。しかし、かかわり続けることは、なかなかできない。かかわり続けるためには、外的な支援も大切だが、やはり内面にある堅固な向上意欲や追究意欲が左右する。

学習対象と出会った子どもたちの内面に、「どうして？」
「えっ本当？」「早くしたいな。」など、問題意識や憧れを湧き起こさせたい。これらが、「なぜ調べるのか *why*」
「何を調べるのか *what*」「いかに調べるのか *How*」という追究のきっかけや見通しを子どもの側に生起することになる。つまり、子どもにとって、学ぶ意味である学びの必要感・必然性(学びへの発心)が獲得される。

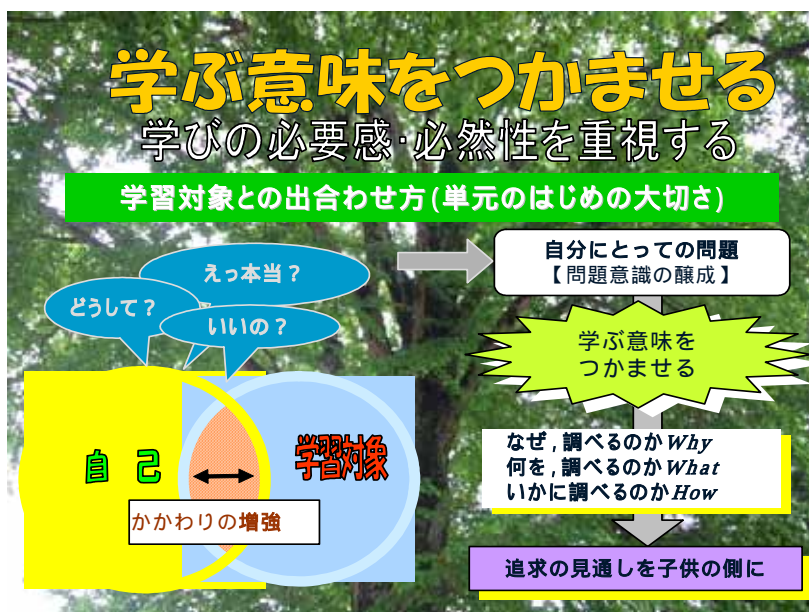
子どもの問いー鋭い感受性から

子どもが自分で問いをもつということが可能になるのは、事実に基づいて自分がもったイメージと自分の既成の考えとがぶつかったときである。

体験や見学を数多く重ねることによって、借りものの知識は解体され、事実に触発され、本来の鋭い感受性が現れてくる。その過程で既知の知識は再編され、主体的な問いをもつようになる。

『住宅地に残った田と用水から学ぶ』

宮城・仙台市立荒浜小学校 菅原康子(食農教育 2001.7月号p71)



無縁の世界から無限の世界へ誘う「問い」^{いざな}

「問い」がなければ、目の前にあるすばらしい「知の世界」が広がっていても、その人にとっては無縁の世界でしかない。しかし、当たり前のように見える世界も、そこに「問い」かけた瞬間から、無限の未知の世界が広がっていくことに気付くはずである。あくまでも子どもの立場で生まれる問題や課題を大切にしながら、子どもの必要感や必然性がある授業を創っていきたいのである。

今こそ、わたしたちは、子どもの学びへの発心を根幹に据えた授業を志向しないと、生きる力の育成どころか学びから逃走する子が増えるに違いない。



真剣に対象と向き合う

自ら考える授業に必要なもの

右の辞書の語義からすると、未知の事柄があり、解決したいという思いや願いをもって、解決のために頭を働かせることが「考える」ことと考える。

したがって、「自ら考える」ようにするためには、まず、未知の事柄が自覚されなければならない。自分が持ち合わせた知識では、すぐに解決できないような問題に出会ったとき、未知が自覚にのぼる。

そこには、分かることか、それとも分からないことかを自ら問いかけ、判断する自己認知（意識）があると考ええる。分からないことを自覚しても、それを「ぜひ分かりたい」という自発的な思いがなければ、「自ら考える」ことには結びつかない。

「問い」を通して、確かさ実感する

知っていることと分かることの教育的な価値には、差はないが、学び方に決定的な違いがある。何かについて、一定の知識をもつことは、必要であるし重要であることは、誰もが認めるところである。その知識が、自分ごととして、物事の意味まで追求した結果であるかが大切である。何の脈絡のないところでのトリビア^(注)的知識は、覚えることに終始し、月日とともに剥落し、定着はしない。

「それはどんなことか、どんなわけか。」を自分自身に問いかけ、「それはこんなことであり、こんなわけである。」と確かな根拠・論拠（事実や論理）で説明できて、初めて確かさが実感でき、納得する。この実感や納得を伴う説明が、自分の知識体系にきちんと位置付けられ、使える知識となる。

「問い」を通して、物事の意味を追求することは、よ

【考える】(他下一)

経験や知識を基にして、未知の事柄を解決（予測）しようとして、頭を働かせる。

Shin Meikai Kokugo Dictionary, 5th edition (C) Sanseido Co., Ltd. 1972,1974,1981,1989,1997



空気のイメージの違いを互いに知る

trivia /trɪˈvɪə/

【名】(複)

ささいな[つまらない]こと。

New College English-Japanese Dictionary, 6th edition (C) Kenkyusha Ltd. 1967,1994,1998

り自分ごととして、自分のかかわりのある世界の理解を形成することになる。先人の成果を単なる「外の事実」を学び手の「問い」を通すことで、自分のかかわりのある世界で語る「内なる真実」として構成・理解し直されていく過程に、確かさを見る。

豊かな「学び」のための「教え」

今、小学校では、「学び」重視の授業と「教え」重視の授業が見受けられる。現実には、後者の実施の割合の方が断然多いと思う。しかし、70年代の反省から、二者背反の関係ではなく、「教え」によって子どもたちは豊かに学ぶ二者共存を大切にしたい。だからといって、子どもたちの興味・関心を無視して、教師が教えたいこと（教えたいことがあるのはまだいい。教科書指導書にあるからの理由は、最悪だ）を繰り返しドリルさせるような授業は論外である。

「教え」ない授業で子どもたちは学ぶのか、「学び」のない授業で「教え」は身に付くのかと考えると、子どもの側で考えた授業という考え方から併存に立脚したい。この会の趣旨にあるように、子どもたちの豊かな「学び」をつくるための教師の「教え」を明らかにしていくことが、今、重視されつつある。

真の学びをつくる新しい視点

従来の授業観は、子どもたちの学びを学習対象の習得過程ととらえ、子どもたちの人間関係や自己認識の形成を重視していなかった。

しかし、子どもの「学び」は、その子(個)だけで孤立的に進行するのではなく、絶えず他者との関係の中で行なわれるものである。また、学習対象と出会うとき、多面的に見て分析し関連付けると、学習対象とのかかわりは

一段と豊かになり、対象を広く深く理解できる。さらに、子どもの「学び」の過程で自分がもっている力を総動員して、できる自分とできない自分との対話がある。もう一人の自分と意識して対話することにより、自信や自己肯定感が高まる。

子どもたちと3者（学習対象・他者・自己）とのかかわりや対話を豊かにすることが、豊かな「学び」のための「教え」として求められているのではないか。

以下、その3視点から求められていることを述べる。

□ 学習対象とのかかわりを豊かにする（対象認識）

- ① 教師の教えたいことを子どもたちの学びたいことに変換する。
- ② 教材や学習課題の決定を子どもたちに委ねる。
- ③ 多様な対象とのかかわりを支援するツールを用意する。

□ 他者とのかかわりを豊かにする（他者認識）

授業は、教師・仲間・地域の人々など様々な人と対話しながら進めるという授業観を共有する。

- ② 隣の子と本気で「分からない。教えて」「わかる?」「どうしたらいいの?」と言える関係をつくる。
- ③ 抑圧的・好ましくない人間関係を生活の中で組み変える。

□ 自己とのかかわりを豊かにする（自己認識）

- ① 新しい学習対象との出会いの際、学校・生活の中での各人の学びの経験を振り返らせる。
- ② 自分なりのアプローチが可能なめあてや課題をつくる。
- ③ 子ども一人ひとりの問題解決を丁寧に受け止め、みんなで吟味する。

このような3つのかかわり（対話）を大切にすることの学びは、この3視点から自己評価できる。

tool /tu:l/

【名】[C]

1 (職人などが手で使用する)

道具, 工具 (類語
instrument)

2 工作機械.

New College English-Japanese
Dictionary, 6th edition (C)
Kenkyusha Ltd. 1967,1994,1998

参考文献 「学習指導の三位一体論」(岡山大学 住野好久) 初等教育資料
「自ら考える授業の変革」(宮城教育大学 武田 忠) 学陽書房
「学びから逃走する子どもたち」(東京大学 佐藤 学) 岩波書店